第10回 CPD 協議会 ECE プログラム委員会幹事会

議事録

1. 日時：平成24年6月29日（金）16:00-18:00

2. 場所：日本工学会会議室

3. 出席者

川島一彦、小松生明、高草木明、秦信宏、長井寿、但田潔、盛山保雄、横山直樹、松本洋一（東洋大学学生、オブザーバー）、四戸靖郎

4. 配付資料

資料 10.1 第9回ECEプログラム委員会幹事会議事録（案）

資料 10.2 ECEプログラム「先端計測とナノ物質」認定証

5. 議事

1) 前回議事録（案）確認

2 箇所の字句修正の上、議事録として承認された。

2) ECE プログラムポスター

高草木委員及び松本洋一氏から、前回の幹事会で提案された方式に修正されたポスター2案が紹介された後、以下の議論を行った。

(1) 2案とも大変よくできている。日本発の光が出ている図面の下の字が黄緑色よりも黒の方が遠くからでも見やすいため、こちらの案を基本とする。図面内の文字は他案の方が見やすいため、これに入れ替える。この際、3行の文字は2行にする。

(2) ”CPD協議会”の文字が目立たないため、色を検討する。

(3) 以上を最終版とし、50部印刷し、日本工学会事務局に到着するように手配する。

(4) CPD協議会加盟学会の他、ECEプログラムの実施機関、建築会館、関心を持って頂ける機関等に配布する。

(5) 立派なポスターを作っていただいた松本洋一さんにご手配いただいた高草木委員に感謝する。

3) ナノエレECEプログラム

(1) 平成23年度認定証の授与

① 認定証を授与すべき受講者の氏名、ローマ字綴り、Dr.の有無に関する情報が事務局に届き次第、事務局において認定証発給の作業に入る。

② CPD協議会の予算逼迫のため、日本工学会から派遣した講師の謝金の削減を川島幹事長から秋永委員に依頼し、基本的に了解された。大阪の講師については、日本工学会事務局からのメール連絡に応答が無いため、秦氏から連絡を取り四戸事務局長に連絡する。

(2) 平成 24 年度計画

① 平成 23 年度と同様に、講師謝金の削減と旅費削減のため東京周辺の講師の起用の可能性を川島幹事長から秋永委員に依頼した。現在、その方向で秋永委員が対応しつつある。

② ナノエレクトロニクス ECE プログラム推進委員会を開催し、委員の意見をプログラムに反映すると同時に、ECE プログラム認定証の授与者の決定を行う。多忙な委員が多いため、TV 会議やメール審議等も適宜取り入れる。

4) 先端計測とナノ物質 ECE プログラム

(1) 平成 23 年度認定証の授与

ECE プログラム認定証は日本工学会から NIMS に送付されている。平成 24 年 7 月 5 日に、物質・材料基礎 ECE プログラム推進委員会の岸委員長のサインを受領予定である。

(2) 平成 24 年度

平成 24 年 5 月 25 日～平成 25 年 3 月 22 日の予定で、”環境とエネルギー材料 ECE プログラム”が開始されている。

5) 今後の ECE プログラムの開発

今後の ECE プログラムとして、どのような視点で考えるべきかに関して自由討議を行った。出された主要な意見は以下の通りである。

(1) 企業から見て、どのレベルの技術者を ECE プログラムに参加させるべきかという視点で考えると、本当の意味のコア技術については、教育の中で教えることは難しい。アプリケーションについては重要であり、企業内でも技術者に論文を読ませる等して新規情報を集めるようにさせているが、そもそも論文を読む機会がとれない。

(2) 一般に論文の主要な書き手は大学、研究所の研究者であり、”論文”として投稿できる内容に限られる。論文にならない分野こそが企業にとって重要な場合が多い。

(3) 企業内で技術者を育てるだけでは異分野交流は望めないため、他流試合に出す重要性はよく認識している。また、ある程度の年齢層になった技術者が新しい知識、情報を社内で獲得することの重要性を認識しても、誰かに気安く聞くということがしにくい場合が多い。

(4) 同一企業でも、違う事業体間では真剣にディスカッションできる雰囲気ではない場合が多い。

(4) 化学工学会の経営ゼミナールは、将来経営者クラスに上がろうとする技術者の登竜門的な位置づけと見なされており、ディスカッション中心の運営が評価されている。参加希望者にはアンケートをし、類似した問題意識を持つ人間をまとめてグルーピングしている。違った企業で似た問題意識を持つ技術者間のディスカッションが好評である。ゼミナールの最後に参加者に発表させ、今後 1 年間に自分は何をするかの決意表明をさせる。そして、1 年後に決意表明がどのように達成できたかも報告させる。社内のラインですべて育ってきた技術者に、決意表明という普段にはしない体験を強いることが、脳の活性化につながるため好評である。

(5) ”おいしいトマトをどう作るか?”といった、一見、突拍子もない内容を紹介する講演会も結構受けている。突拍子もない内容を聞くことにより、同じ事をずっとやってきた技術者が新たな問題意識を持ち、他分野での取り組みを知ることができるため、新鮮に映るためであろう。

(6) 他分野、異分野間の人脈作りに有効に機能することが高い評価の原因の一つではないか。化学工学会の経営ゼミナールはまさにこの視点で評価されているのだと考えられる。

(7) 名古屋で実施されているあるプログラムでは、横串的にいろいろなプログラムを組み、ディスカッションさせていて興味深い。

(8) 企業にいる間はなかなか自由に情報交換したりディスカッションできないが、退職すると自由に意見が言えるようになる。

(9) セミナー専門業者が組むセミナーにはおもしろいプログラムが多いが、ECEプログラムは日本工学会が実施するという視点が重要である。

(10) 日本工学会は学会との関係が密接であるから、あるテーマを選び、これに関連する現状の取り組み、問題点などを学会を通して専門家に講演させるという取り組みが企業から見て有効ではないか。この際、主題となるテーマからかなり外れた分野も取り入れ、他分野、異分野の活動を紹介することが、技術者に対する気づきとして重要であり、また、人脈作りにも有効だと考えられる。

(11) 次回の幹事会ではECEプログラムに対して参加者や企業の立場からどのような内容が求められるか、どのようなECEプログラムが必要かという視点に重点を置いて、上記のフリーディスカッションを継続する。このため、委員は自分の考えを各1枚程度のメモにして持参する。

6. その他

第11回ECEプログラム幹事会は平成24年7月24日(火)10:00-12:00に、日本工学会において開催する。